はじめに

今、被災地に暮らす私たちがなすべきことは、震災の教訓を正しく捉えて、それを世界と未来に向けて発信することである。教訓を正しく捉えるには、震災とその後の復興の中で私たちが遭遇した現実を、主観的あるいは情緒的に見るのではなく、客観的あるいは科学的に見る必要がある。それには、個々の事実を拾いあげ積みあげる熱い粘着力と、全体像を冷静に考察する冷めた分析力が求められる。他方、世界と未来に発信するには、これからの高齢化社会に向けての教訓や次の大規模災害の被害軽減に生かしうる教訓を明らかにすることが欠かせない。これには、被災体験者の生きた声を聞いて、それを生活文化を見据える文明論的な視点で考察することが求められよう。

こうした課題に応えるには、被災の全体像を把握しうるデータ、生きた声が聞こえるデータを収集しなければならず、次にそれを客観的に分析する手法と視点を獲得しなければならない。つまり、災害復興公営住宅やこれからのコミュニティが直面する高齢化の問題や見守りの問題を解決するためにも、今一度原点に立ち返って、再建の全体像を客観的に明らかにしなければならないのである。

本調査は、上述の課題に応えるべく、復興の全体像を解明する壮大な作業の一環として、兵庫県からの委託を受け、（財）阪神・淡路大震災記念協会「人と防災未来センター」のスタッフが協働して災害復興公営住宅団地についての大規模調査を試み、その結果を未来に発信する視点で分析しようと取り組んだプロジェクトである。

報告の行間から、住まいやコミュニティの再建に関わった様々な人々の熱き思いや叫びを読み取っていただければ、と思う。分析の行間から、これからの高齢化社会を生き抜く確かな道筋を読み取っていただければ、とも思う。この報告書が、これからのコミュニティ形成、安心して暮らせる社会構築の一助になることを、願ってやまない。最後に、この貴重な調査分析の機会を与えていただいた兵庫県、この膨大な調査の実施に奮闘していただいた調査員の皆さんに、心からのお礼を申し上げます。

平成１５年８月

（財）阪神・淡路大震災記念協会
人と防災未来センター　上級研究員
室　崎　益　輝（神戸大学都市安全研究センター教授）
立　木　茂　雄（同志社大学文学部教授）
小　林　郁　雄（株式会社コー・プラン代表取締役）